川崎市国際交流協会会長賞作品

「夢をはこぶつばさ」

東生田小学校　６年　丹野　夏月

僕の将来の夢はパイロットになることだ。保育園の卒園式で将来の夢を聞かれたときも、「ぱいろっとお」と大きな声で答えた。僕の夢はそのときから変わっていない。

パイロットになろうと思ったのは、小さいころ、家族旅行で飛行機に乗ったことがきっかけだった。こんなに大きな飛行機に大勢の乗客を乗せて大空に飛び立っていく姿が、とても格好いいなと思ったのだ。でもそのときは、ただ格好いいなぁと思うぐらいで、パイロットになりたいという気持ちはそんなに強くはなかった。

そんな思いに転機があったのはつい最近のことだ。

小学校五年生の夏休みに行った三度目のグアム旅行で、セスナ機の操縦体験をやった。グアムでは教官が同乗していれば、子どもでも飛行機の操縦をすることができる。小型のセスナ機といっても、実際は大型トラックほどの大きさがあり、最初は、「こんな大きな飛行機、操縦できるのかなぁ？」と不安だった。しかし、教官が操縦方法を優しく教えてくれたので、自信につながった。優しい教官の指導のおかげで僕は、自分の操縦で大空を自由に飛ぶことの楽しさ、気持ちよさを知ることができたのだ。

そして、そんな貴重な体験をしたグアム旅行の帰り道、パイロットへのあこがれを強くするもう一つのできごとがあった。

成田空港に向かう帰りの飛行機で、思わぬトラブルが起こった。グアムの空港を飛び立って間もなく、右のつばさの高揚力装置が壊れてしまったというアナウンスが流れた。それを聞いたときはとてもびっくりして、「日本に帰れるのかなぁ？」と、とても不安な気持ちになった。

でもそんなとき、機長が乗客たちに優しく力強い言葉をかけた。「安心してください」といった。

冷静で落ち着いた口調で語りかける機長の言葉を聞いた瞬間、僕はすっと気が楽になった。そしてその言葉は正しく、一度グアムに戻り、翌日、無事に日本に帰ることができた。

このできごとをきっかけに、パイロットへの見方が大きく変わった。

最初は、パイロットになるためには飛行機を操縦する技術や、能力が大事なのだと思っていた。

しかし、そうではなかった。もちろん技術や能力も必要だけど、本当に大事なのは機長の「温かいこころ」だと強く思うようになった。どんなときも乗客を安心させられるような気配りができなければならないのだ。

また、パイロットの仕事は多くの乗客の命を預かっているので、責任重大なものだと改めて実感した。

こんな勇敢なパイロットになるために、僕ががんばっていることがある。それは英語だ。七年ほどやっているが、知らない単語はまだまだたくさんある。なので、これからもしっかりと勉強して、夢に近づいていきたい。

パイロットになったらやりたいことがある。それは、僕が操縦している飛行機に家族を招待して、何時間かのフライトを楽しんでもらいたいということだ。僕の両親は旅行が好きなので、きっと喜んでくれるのではないかと思っている。

いつの日か、憧れの操縦かんを握って青空を飛びたい。